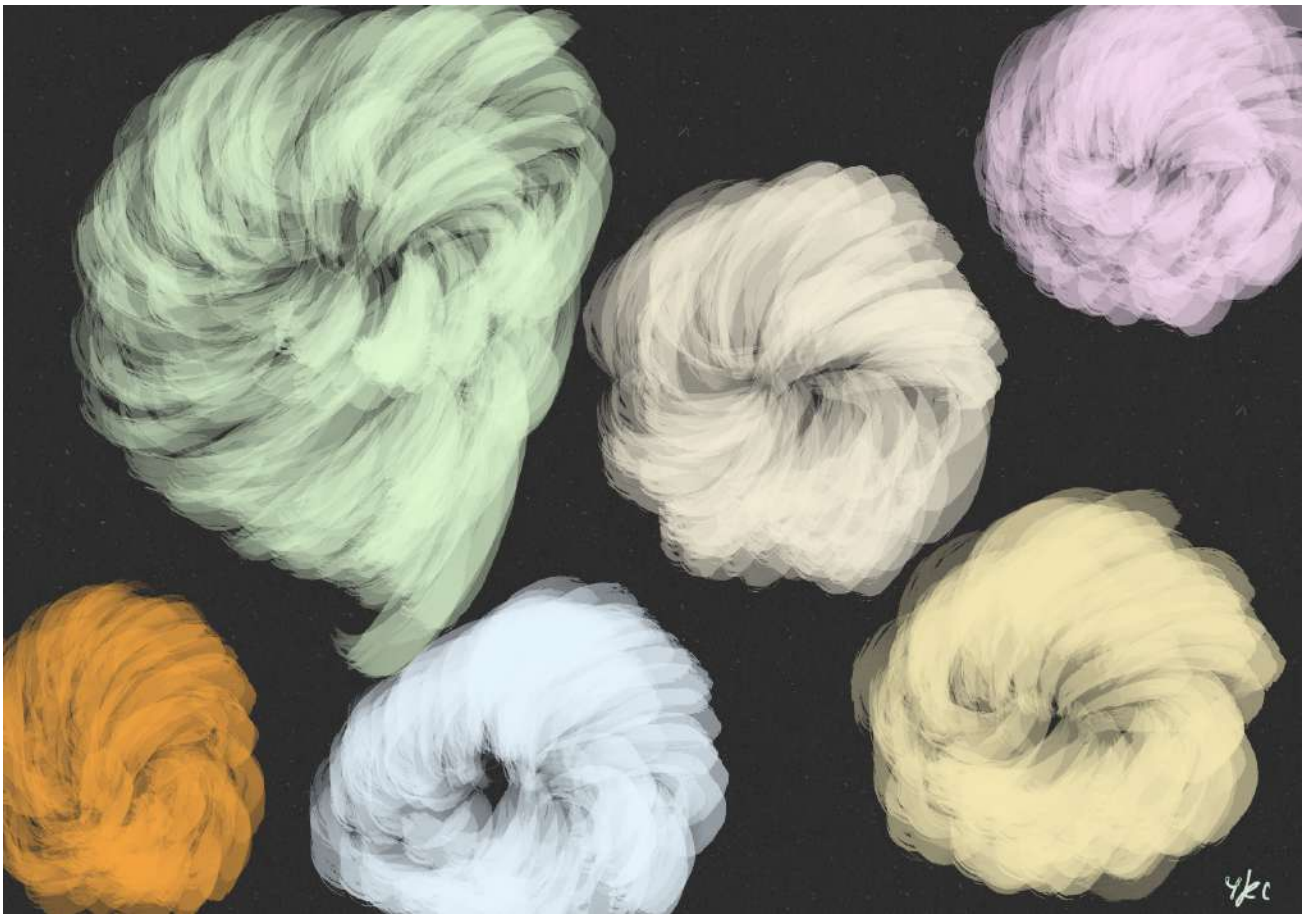
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 294

Website:「発達理論の学び舎」



No.442 心玉_Inner Balls

© YOHEI KATO 2020

目次

5861. 今朝方の夢

5862. 初夏の爽やかな香りが漂う朝に:日本の夏とつながりの回復・涵養

5863. 良縁と運に恵まれた人生と大いなる世界からの問いかけ

5864. 他界4日前のカート・フィッシャー教授と面会する夢

5865. 宇宙空間と一体となるビジョン:デジタル空間上の美術館の創造に向けて

5866. 今朝方の夢

5867. 生涯最後の日に捧げる感謝の祈りに向かって

5868. 発達を阻害する断片化の意識と多様な探究領域と実践領域を持つことの大切さ

5869. 今朝方の夢

5870. 今朝方の夢の続き:天高く上昇する龍のようなエネルギー

5871.「タイタニック型」の能力開発や人材育成の危険性得

5872. 生と死と結びついた発達:今朝方の夢

5873. 渇望と飽和:土着神と創作活動

5874. 再び活気付き始めたフローニンゲンの街

5875. マジョルカ島との縁:何者かに向かって

5876. 今朝方の夢

5877. 絶え間ない平常心を持って:愛と美の探求と実践の日々

5878. 今朝方の夢

5879. 久しぶりに両親と話をして

5880. 今朝方の夢

5861. 今朝方の夢

時刻は午前6時に近づこうとしている。この時間帯はもう辺りはすっかり明るくなっており、朝日も昇っている。今、朝日が赤レンガの家々を照らし始めているところなのだ。

爽やかなフローニンゲンの朝。それを形作っているのは、優しく吹き抜ける清々しいそよ風と、小鳥たちの清澄な鳴き声である。そうした朝を毎日味わうことができる幸福。起床直後からそうした幸福感に包まれ、そこから就寝にかけても私は絶えず幸福感に包まれているような気がする。そうした毎日を過ごすことができていることに感謝をしよう。そして、幸福感を感じている状態から生み出される種々の形を曲や絵として表現し、共有していこう。絶え間ない表現と共有を続けていくこと。それが自分の人生だ。

今朝方は印象に残る夢を見ていた。いつものようにそれを振り返り、そこから早朝の創作活動に入っていこう。

夢の中で私は、アメリカの西部劇で出てくるような街にいた。そこは人や店が少なく、とてもこじんまりとしていた。あるバーのような店の前を通り過ぎようとした時、砂埃が舞い上がり、それが左の目に入ってしまった。すると、左の目から涙が溢れてきて、涙を拭おうとしたところ、後ろから日本語で話しかけてくる女性がいた。左向きに振り返ったのだが、そちらの目は砂埃で開けることができず、すぐにその女性を確認することができなかった。みると、それは小中高時代の女性友達(NI)だった。彼女は親切にも、小さなハンドタオルを私に渡してくれ、それで涙を拭くようにと述べてくれた。彼女の親切心に甘え、ハンドタオルを受け取り、涙を拭ったところで夢の場面が変わった。

次の夢の場面は、巨大なショッピングモールの中に私はいた。ただしそこでは、店は全て閉まっていて、どうやらそこで学校の卒業式があるようだった。ショッピンモールを学校が貸し切り、そこで卒業式とその後の立食パーティーを行うような段取りになっていたのである。店は全て閉まっているはずなのだが、どういうわけか、アップル社のマックの最新版を購入することができるような計らいがなされていて、多くの店員が各フロアに散らばっていた。

私はすでに最新のマックを持っていたのだが、ソフトウェアのアップデートに関して何か抜け漏れがないかを確認するために、近くの休憩テーブルで作業をしていた店員の男性に話しかけた。店員

が私のマックを確認すると、ソフトウェアのアップデートは必要ないとのことだが、もっと動作を軽くすることができると言う。その店員の方が私のパソコンをいじっていると、パソコン内に匿名の何人かからのメッセージがひっそりと隠れていて、それらのメッセージを開けて見せてくれた。卒業祝いのメッセージもあれば、何世代も後の後輩が、私の高校時代の成績が極めて優れていたことに言及し、私のこれからの活動･活躍を楽しみにしているという好意的なメッセージがあった。否定的なメッセージは何もなかったので、それらのメッセージを消去する必要はないかと思い、そのままにしておくことにした。

その後、立食パーティーの時間がやってきた。ショッピングモール内には、高校時代の3学年の全員がその場にやってきていたので、その場はとても混雑していた。フロアの1階から3階ぐらいにかけて長蛇の列ができており、みんな食べ物をもらおうとしているようだった。私は特にお腹が減っているわけでもなく、また見た感じあまり質の高い食事ではなさそうだったので、水だけをもらい、もし何か食べ物を食べたくなったら、果物類だけいただこうと思ってさらに上のフロアに向かった。するとそこで、サッカー部のキャプテンの友人に出会った。

実は彼からはサッカー部に関する紹介の挨拶とその司会進行の仕事を任されており、パーティーの前に、小中高時代の友人(SS)と一緒にその仕事をドタキャンしてしまっていたのである。私に仕事を任せた彼はとても怒っていて、彼を宥めるようにして話を聞いている自分がいた。そこからも立食パーティーに付随した諸々のイベントが行われることになっていたが、やはり私はこうした人が多い場所や騒がしい場所があまり好きではなく、残りのイベントに参加することをせずにもう帰ろうと思った。フローニンゲン:2020/5/28(木)06:16

5862. 初夏の爽やかな香りが漂う朝に:日本の夏とつながりの回復・涵養

時刻は午前6時半を迎え、赤レンガの家々が朝日に完全に照らされるようになった。今日の空は雲ひつなく晴れ渡っていて、小鳥たちが気ままに空を飛んでいる。彼らの姿を眺めている自分もまた気ままなのだ。内側の気の流れるままに進行していく毎日。気の種類と量にあった活動にただただ従事することで進行していく日々。私は彼らと同じく、気の赴くままに生きている生命だったのだ。

初夏の爽やかな香りが漂う朝。その爽やかさを言葉で表現することは難しいが、私は毎年当地での夏の清々しさに感動してしまう。特に、旅に出かける際の朝に感じる清らかな風は強く印象に残っている。それは自分をそっと送り出してくれるような優しさがある。なるほど、今年の春に予定していたアテネ旅行が夏に延期になったことは、きっとそよ風がその時期に自分をアテネに送り出そうと考えてくれているからなのかもしれないと思った。彼らは私をアテネに運んでくれ、そしてフローニンゲンに戻ってきた際には、再び優しく自分を包んでくれるだろう。

セミの鳴き声が聞こえてくるような日本の夏をもう体験することはないのかもしれないとふと思ってしまった。好んで夏に日本に帰ることはないであろうから、もしかしたら、自分の人生においてもう日本の夏を味わうことはないのではないかと思ってしまったのである。

日本はこれから夏に向かっていく。ひょっとすると、もう随分と気温が高くなっているかもしれない。気がつけば後少しで6月なのだ。今日のフローニンゲンの最高気温は16度であり、最低気温は4度と肌寒さを感じさせるぐらいの気温である。仮にもう日本の夏を体験することができなかったとしても、日本の夏に関する記憶は自分の内側に存在し続けている。だが、そうした記憶もここ最近は抜け落ちていっているように感じる。ただし幸いなこととしては、抜け落ちせていく記憶があればあるだけ、記憶が濾過され、夏の純粋な思い出だけが残り始めているように思う。

その他にも先ほど、形而上的な世界はひょっとすると、私たちそれぞれに固有の叫びを上げることを託しているのではないかと思った。叫びの根源と促しは、そうした世界に存在していて、それは自己の最奥部分とつながっている。つながりの回復と、つながりの涵養。自己の最奥につながること、そして自己を超えた世界とのつながりを深めていくことの大切さを改めて思う。フローニンゲン：2020/5/28（木）06:54

5863. 良縁と運に恵まれた人生と大いなる世界からの問いかけ

時刻は午後7時を迎えた。振り返ってみると、今日もとても従事していた。ここ最近はもう、なぜ日々がこれほどまでに充実しているのかを考えるのではなく、それがそれとして絶えず今ここにあることの中で感謝の念を持つことだけをするようにしている。そして、自分が充実感を持ったり、感じたりするのではなく、自己そのものが充実感そのものであることを今一度確認するようにしている。こうした

充実感に合わせて、また人生が新たな方向に、しかもそれはこれまでにないような幅と深さを持って動き始めていることに気づく。

協働者のある方が「自分は運が良い」と述べていたが、私も全くそうである。自分は良縁と運に恵まれて今ここにこうしているのだと思う。2020年というのは、自分にとってまた大きな転換点の年であるように思える。ここから人生がどのように動いていくのか。それは多分に未知であるが、良縁と運の導きに従うまでである。

本日のオンラインミーティングの中で、長年山伏修行をされておられる方から教えていただいたのだが、山伏の言葉で言えば、まさにこれから起こることを全て「受けたもう」の精神で受け入れていく。絶えず充実感と幸福感と一体となり、良縁と運の働きに従っていれば、全てを受けたもうの精神で受け入れていくことができるに違いない。

今日は先ほど、イギリスから数冊の書籍が届いた。アマゾンの箱に入っていて、運ばれてきたとには随分と重たく感じた。今から箱を開封したいと思う。先日購入した、精神分析学、群衆心理学、インド音楽に関する書籍などがこの箱に入っているはずである。6月以降はまた時間を作って読書に励もうと思うので、それらの書籍を読むことが今から楽しみだ。

本日の正午に行われたミーティングの中で、そう言えばもう一つ印象に残っていることがある。それは、今回のコロナの一件は、世界が私たちに何かを伝えようとしてきたのではないか、という観点である。ここで言う世界とは、多分に形而上学的な世界とでも言えるだろうし、自己を超えた大いなる世界と言えるかもしれない。いずれにせよ、今回の一件が私たちに突きつけてきた問いやメッセージがいかなるものなのかについて、立ち止まって考える必要があるのではないかと思う。さもなければ、私たちは今回の件から重要な学びを得ることができず、結果として人間社会がさらに一歩広く深い世界になっていくことができなくなってしまうだろう。

世界は私たちに何というメッセージを投げかけてきたのか。それを一人一人が考えていくことはとても大切なことのように思える。フローニンゲン：2020/5/28（木）19:28

5864. 他界4日前のカート・フィッシャー教授と面会する夢

時刻は午前5時半を迎えた。今、朝日が赤レンガの家々に照り始めた。今朝は雲ひとつなく、快晴の空が広がっている。今朝は起床直後に、小鳥たちがいつも以上に大きな鳴き声を上げていたが、今は幾分落ち着いている。あれは彼らにとっての朝の儀式的な行いだったのかもしれない。

平穏さで満ち溢れた目の前の世界。今日も大きく開かれた書斎の窓を通じて眺められる景色を見ながら、自分の取り組みをゆっくりと進めていこうと思う。

昨日、夢分析に関する分厚い専門書が届いた。今から振り返る夢もまた、将来の夢分析の題材になるだろう。夢の中で私は、ハーバード大学を訪れ、カート･フィッシャー教授に面会することになっていた。その日は晴天であり、春の陽気さで満ち溢れていた。

面会場所は、講堂のような場所であり、どこか部屋に入って面会をするのではなく、講堂の共有スペースのような場所に腰掛けて話をすることになった。フィッシャー教授との再会は数年振りであり、お互いに笑顔で挨拶をし、握手をした後に、互いの近況報告を簡単に行なった。そこからは、発達研究に関することをテーマとして話をさせていただいた。フィッシャー教授と直接会って話をさせていただける機会はなかなかないので、この貴重な機会を無駄にしまいとあれこれと話を聞いていたが、もう思い残すことなく話をさせていただいたと思ったところで面会を終えることにした。ちょうどフィッシャー教授はこれから授業があるとのことだったので、タイミングとして非常に良かった。

フィッシャー教授と講堂を出たときに、眩しいばかりの太陽の輝きを感じた。すると、フィッシャー教授のアシスタントの男子学生がやってきて、フィッシャー教授の体を支えて、これから授業がある場所に向かって歩き始めた。どうやらフィッシャー教授は足を悪くされておられるようだった。

フィッシャー教授は笑みを浮かべながらも、同時に少ししんどそうな表情を浮かべて、「ここで少し休んでもいいかい？」とアシスタントの学生に述べ、芝生の上にしゃがみ込んだ。その姿を見たときに、私は今日の日付を確認したところ、3/26/2020であることを知り、今から4日後にフィッシャー教授がお亡くなりになられることを知っていた。先ほどフィッシャー教授と交わした言葉が最後のものとなり、あれこれと話をさせていただいたことがどれほど貴重なものかを思った。

私はもう一度、芝生の上にしゃがみ込んだフィッシャー教授の方を振り返った。すると、先ほどと変わらずに優しげな笑顔を浮かべているフィッシャー教授がそこにいた。春の陽気さを感じられる太陽の光もまた優しく、フィッシャー教授の全身を包んでいた。今朝方はそのような夢を見ていた。

この夢はとても印象に残っている。場面の数は少なかったのだが、各場面がもたらす感覚が深く、それらの感覚は今も自分の内側にある。面会を終えた後に、その日の日付を知り、その4日後に先ほどまで楽しげに話をしていた人が亡くなるというのはとても複雑な気分を引き起こしたが、太陽の優しい光が、死そのものが優しさに満ちた現象であることを私に伝えてくるかのようであった。フィッシャー教授ご自身が「ここで少し休んでもいいかい？」と述べたように、次の生が始まるまでそこで少しお休みになられたのだと思う。この夢は、死の中にある浄福感を感じさせてくれるものであった。フローニンゲン：2020/5/29（金）06:09

5865. 宇宙空間と一体となるビジョン：デジタル空間上の美術館の創造に向けて

時刻は午後7時を迎えた。今日は土曜日だと思っていたが、本日は平日の最後の金曜日であった。今日はどこか休日を感じさせるような穏やかさが際立っていたように思う。毎日が休日であるかのような落ち着きと穏やかさがあるのがこの街の特徴ではあるが、今日は一段とそうした雰囲気があったように思う。

本日の午後に仮眠を取っている最中に不思議なビジョンを知覚した。それは自分が宇宙空間に飛び出していき、宇宙と一体になるビジョンだった。大宇宙と一体になった時、言葉を失ってしまうような感動があった。それは大きな畏怖心がもたらす感動であったと言っていいかもしれない。そうした感動は全身を駆け巡り、身体感覚としても特殊なものがあった。それは平穏さの境地の感覚、すなわち涅槃のような感覚があった。仮眠から目覚めた直後もそうした感覚が残っていた。

今日は午前中にふと、デジタル空間上に自分の美術館を作ることについて考えていた。そこには自分の内面世界から形になって現れてきた絵が無数に置かれていて、背後には自分の内面世界から形になって現れてきた音楽が流れている。これからのテクノロジーの発展に思いを馳せ、いつか自分で作ったデジタル美術館をバーチャル空間で体感することができるかもしれない、ということを想像していた。本当にそうした日はいつかやってくるように思える。

早朝の作曲実践の最中、理論書の譜例を参考にしていると、興味深い音楽世界を持っているものに出会った。それは、ポール･ヒンデミス(Paul Hindemith:なぜか「パウル･ヒンデミット」と変な発音で日本語表記されていることが多い)の曲の抜粋である。ヒンデミスの音楽世界に惹かれるものがあったので、ヒンデミスが執筆した下記の理論書と彼の音楽思想がわかる書籍を来月に購入しようと思う。

- The Craft of Musical Composition: Theoretical Part - Book 1
- The Craft of Musical Composition: Book 2
- Traditional Harmony, Book 2: Exercises for Advanced Students
- A Composer's World: Horizons and Limitations

それらの書籍以外にも、ヒンデミスのピアノ曲が収められた"Twentieth-Century Piano Classics: Eight Works by Stravinsky, Schoenberg and Hindemith"も購入文献リストに加えておいた。ここ最近は、毎月月の始めにまとめて書籍を購入するようにしている。

昨日届いた群衆心理学関係の2冊の書籍を近々読みたいという気持ちが高まっている。明日は少し時間を取って読書でもしようかと思う。フローニンゲン:2020/5/29(金)19:28

5866. 今朝方の夢

時刻は午前4時半を迎えた。辺りはゆっくりと明るくなり始めている。朝日を拝むのはもう少し先になりそうだが、空の色がゆっくりと変わっていく。今朝は午前4時前に起床し、その時にはもう小鳥たちが鳴き声を上げ始めていた。今も数羽の小鳥たちが1日の始まりを祝福するかのような鳴き声を上げている。

昨日、無事にアテネ行きのフライトの予約を変更した。それを受けてホテルにも連絡し、ホテルからの返信を待っているところだ。今回ばかりはアテネに行くことが実現されて欲しいと思う。7月末のアテネはかなり暑いことが予想されるが、何かの導きによってその時期にアテネに行くことになったのだと思う。

それでは、今朝方の夢を振り返り、少々絵を描いたら、早朝の作曲実践に取り掛かりたい。今日の午後には少し時間を取って、「一瞬一生の会」のための音声ファイルを作成したいと思う。昨日も音声ファイルを作っていたのだが、今日は参加者の皆さんが書いてくださっているリフレクションジャーナルを読んで、それをもとにいくつか音声ファイルを作成していこうと思う。

今朝方の夢。夢の中で私は、トロッコのような乗り物に乗って洞窟内を移動していた。乗り物の進み方を見ていると、どうやら洞窟を下っているようだった。洞窟の高さが低かったので、トロッコに乗っている最中は、天井に頭がぶつからないようにかがむ必要のある箇所があった。私の後ろには、小中高時代の親友（NK）が座っていて、後ろを振り返って、時々彼に話しかけていた。私の前には小中学校時代の2人の友人（AQ & KM）がいて、2人の座るスペースが窮屈そうだったので、私は後ろの友人とそのまた後ろにいる友人にお願いをして、スペースを空けてもらうようにした。

トロッコが目的地に到着すると、そこには学校の教室のような場所があった。気がつくと、私はその教室の中にいて、それは実際に通っていた小学校の教室だった。しかも、6年生の時に使っていた教室だった。教室では授業が行われており、6年生の時の担任の先生が授業を行なっていた。それは算数の授業のようだったが、授業の進み方があまりにも遅く、そして問題があまりにも簡単すぎたため、私は家に帰って1人で勉強しようと思った。

クラスの全員は、先生の話に熱心に耳を傾けており、彼らの姿は従順すぎるように思えた。そこで私は、さりげなく反抗的な態度を先生に取るかのように、「ではこのへんで帰ります」と述べて教室を後にしようとした。すると先生は、私が帰ることを必死に止めようとしたが、私の意思は固かったので、もう靴箱まで降りて行き、気がつけば靴を履いていた。そこではもう先生の姿は見えず、結局授業はもう終わったようであり、何人かの友人たちも教室から靴箱にやってきた。

そこから私は小学校5年生の時に使っていた教室の前を通りながら校門に向かっていたところ、1人の女性友達（MH）に声を掛けられ、彼女の兄はプライドが高いらしく、兄と話をするときはあまり兄をからかわないで欲しいと言われた。私は彼女の兄にそのような態度を取ったことはなく、人を笑わせる時にはいつも自虐的な形で行なっていることを彼女に伝えると、少し心配した表情を浮かべながらも、どこか納得しているようだった。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、母から電話がかかってきて、電話を受けると、何やら銀行から請求書が届いたとのことだった。大学のOB·OG会の会費がうまく払い落とされなかったようだった。金額は9000円を少し超えるほどのものだった。母から電話がかかってきた時には取り込み中だったので、あとで詳細にはついてはテキストメッセージを送ってもらうことにした。そこで夢の場面が変わり、最後の夢の場面では、小学校6年生の時にお世話になっていた担任の先生が再び現れ、そしてもう1人、中学校時代にお世話になっていた女性の数学の先生が現れた。

私の体はまたトロッコの上にあって、前後には何人もの友人がいた。まずは数学の先生が授業を受け持つことになっていたらしく、トロッコの先頭に立って、口頭で授業をし始めた。その授業の内容についても簡単に思われたので、退屈そうにしていると、それでは中学校の数学の範囲を超えて、高校数学のIAを先取りする形で学ぼうという提案を先生は行った。私はそれでも退屈に思えてしまい、トロッコが早く目的地に到着することを祈っていると、小中学校時代の女性友達(AS)が数学の問題で苦戦しているようだったので、彼女の手助けをすることにした。無事に問題を解き終えると、先生のところに解答用紙を持って行った。

先生は、友人の彼女の容姿を可愛いと褒めながら、それでいて時に大人の表情を見せるというようなことを述べていた。その言葉を聞くとすぐに、私の体はまた学校の教室にあって、そこでは社会の問題を解いていた。歴史か何かの問題であり、それもまたあまり面白いものではなく、後ろの席に座っていた友人(HY)に問題と解答用紙を渡し、彼がどれくらい解けるのかを見てみようと思った。すると意外にも順調に解答用紙を埋めており、嬉しい驚きがあった。

今朝方はそのような夢を見ていた。そういえば実際には、飛行場を訪れる場面が先にあり、そこで小型の飛行機が旋回する姿を眺め、眺めているはずの飛行機の中にいつの間にか自分がいて、その飛行機がセキュリティーチェックのような機械をくぐって、洞窟内に入って行ったことを思い出した。フローニンゲン:2020/5/30(土)05:19

5867. 生涯最後の日に捧げる感謝の祈りに向かって

時刻は午前5時半を過ぎた。今、ゆっくりと朝日が昇り始め、赤レンガの家々の屋根に朝日が照り始めている。

よく笑い、よく感動し、感動の涙をよく流す日々。そんな日々を私は毎日送っている。昨日も何気ないことで笑い、あるテーマについて考えていると感動の涙を流してしまった。後者については、仮に人生を締め括るにあたって無人島で生活することになり、仮に数冊ほど書物を持っていけるのであれば何を持っていくのかについて考えていた際に起こったことである。

人生の終焉に向かっていく過程の中で寄り添っていたいと思う書物はいくつもあるが、私はそこに自らが綴った日記が存在していれば、どれだけ素晴らしいことかと思った。昼には波の音を聞きながら、30年前のある日の日記を読みながら大いに笑い、夜には焚き火の音を聞き、満天の星空を眺めながら50年前のある日の日記を読んで涙を流すような形で、自らの人生を振り返り、仮に人生の中でどのようなことがあったとしても、綴られた日記を読んで、改めて自分の人生について感謝をしながら生涯を閉じていくこと。

自分の人生全体を絶対的な肯定感を持って全てを受け入れ、全てに感謝の念を持って生涯をゆっくりと閉じていくこと。おそらく自分はそうした形で生涯を閉じようとしているがために、今このようにして毎日日記を綴っているのだと思う。仮に無人島に行かなかったとしても、生涯を閉じる際には、この人生を通じて綴ってきた自分の日記を読み返すに違いない。

自分の人生が、良縁と幸運によって彩られていたということ。人生の最後には、それを改めて感じ、大きな感謝の念を持ってあちらの世界に行く自分がいるように思える。あちらの世界には何も持っていくことができないと思っていたが、感謝の念であれば持っていけるのかもしれない。そのようなことを考える。

今日もまた、見えないところで働いている良縁と幸運の恩恵に授かりながら、自らのライフワークに取り組んでいく。北欧に近い辺境のこの街で、誰にも気づかれない形で、それでいて1人粛々と自分の取り組みを小さく前に進めていく。小川の流れのように優しげで、緩やかな人生。小川の如し人生のある1日を今日も生きていく。今日という1日は、生涯最後の日に捧げる大きな感謝の祈りにつながっている。フローニンゲン：2020/5/30（土）05:59

© YOHEI KATO 2020

5868. 発達を阻害する断片化の意識と多様な探究領域と実践領域を持つことの大切さ

時刻は午後7時を迎えた。振り返ってみれば、今日もまた穏やかな1日だった。本日は土曜日であることが、なお一層のこと平穏さをもたらしていたのだと思う。

昨日嬉しいことに、窓辺に嬉しい訪問者があった。窓ガラスに何かがぶつかる音が聞こえたので、そちらを見てみると、小丸っちょいスズメが窓際にやってきて、こちらを見ていた。思わず目が合い、スズメはしばらくそこにいた。そんな光景があった。これからの季節においては、窓際にスズメがやってくることが増えるだろう。それはこの地での生活における夏の風物詩である。

今日もいくつか雑多なことを考えていたのだが、1つには哲学者のヨルゲン･ハーバマスの指摘に関するものがある。ハーバマスは、社会の発達を阻害しているのは、誤った意識であるというよりも、断片化した意識であると指摘している。この点については、ちょうど先日に協働者の方々とオンラインミーティングでも話題に上がった分断的な世界観の話とも多分につながってくる。実際のところは、断片化した意識というのは、社会の発達を阻害するだけではなく、個人の発達を阻害するものである。発達の原理に差異化と統合化というものがあることを考えれば、それは明らかである。

個人がそうした断片化された意識を乗り越えていく際に、改めて複数の探究領域や実践領域を持つことが鍵を握るのではないかということも考えていた。本日初めて芽生えた考えとしては、能力や知性がより高度な次元に発達していく際に、次元の飛躍をもたらすのは、バグやアウトサイダー的な要素の存在なのではないかというものだった。発達とはそもそも突然変異的な現象であるとも言えるため、単に均質･同質なものが組み合わさってもより高度な段階特性は芽生えず、一つ次元が上がるためには、バグやアウトサイダーといった異質な存在が必要なのではないかと考えていたのである。

端的には、内面空間において、バグやアウトサイダーを排除するような均質主義･同質主義（あるいは潔癖主義）の発想を持っているのであれば、差異を持つ異質な存在が既存の存在と出会う機会が失われてしまうのではないだろうか。また、既存の存在と異質な存在が単に出会うだけではなく、それが絶妙な組み合わされ方をすることもまた重要なのだが、それが起きる要因やプロセスは未だ未知である。それはひょっとすると、思わぬ偶然のもたらす産物なのかもしれない。いずれにせよ、

異質なものが自分の内側に混入する機会と、それらが既存の存在と偶然の形で結びつき合うためには、やはり多様な探究領域や実践領域での活動を行っていくことが大切なのではないかと思ったのである。今日はそのようなことも考えていた。フローニンゲン:2020/5/30(土)19:29

5869. 今朝方の夢

時刻は午前6時にゆっくりと近づいている。早朝の爽やかな青空と、涼しげなそよ風が目の前にある。今この瞬間は小鳥たちの鳴き声が止んでいて、彼らはどうやら少し休憩に入っているようだ。そう思っている矢先に、1羽の小鳥がまた鳴き声を上げ始めた。

昨夜の就寝前に、小鳥たちが澄み渡る鳴き声で自分を夢の世界に導いてくれていたことを思い出す。とても落ち着いた鳴き声であり、それに耳を傾けていると入眠はすぐだった。小鳥の導きによって見た夢。それはとても印象的だった。

夢の中で私は、小さなビルの一室にいた。そこはどこかの大学院のキャンパスの1つのようだった。私は学生としてそこにいたわけではなく、ある教授と面会をするためにそこに足を運んだようだった。面会の後、ふと私は、博士課程の進学について考えた。これまでの探究の成果を1つの論文にまとめる時期にそろそろあるかもしれないと思った私は、博士課程に進学するのも悪くないと考え始めていたのである。すると偶然ながら、小中高時代の2人の友人(JK & HY)が私に声を掛け、3人で協働して博士論文を執筆しないかと持ちかけてきたのである。

彼らも博士課程への進学を考えているようなのだが、博士論文のアイデアがないとのことであり、私にアイデアを求めてきた。それに対して私は、その場で思いついたアイデアを彼らに伝えると、そのアイデアをもとに博士論文を協力して執筆していこうということになった。ただし、博士課程への応募はその日の深夜までということであり、論文のアイデアをすぐさま文章の形にする必要があった。それに関しては、アイデアを出した私が一番詳しいであろうから、今日中に文章をまとめ、2人に共有することを約束した。

この大学院に在籍している教授は全て欧米から来ており、授業も全て英語で行われる。論文の執筆についても当然ながら英語で行う必要があり、英語での論文の執筆を2人に任せることは難しいと思ったことも、自分が論文概要を書こうと思った動機でもある。

2人と別れ、パソコンを開けるスペースに向かい、いざ論文概要を執筆しようと思ったところで、突然他の仕事が2件入った。論文概要の執筆よりもそちらをまずは優先しなければならず、果たして今日中に論文概要を書くことができるのかが不安になってきた。

しばらく他の仕事に取り掛かったところ、もう論文概要を書く時間など残されていないことに気づいた。実は私は、2人の友人に案として出した論文のアイデアは、自分が一番書きたい内容ではなく、2番目か3番目ぐらいの研究テーマだった。そうしたこともあり、博士論文としてまとめるのであれば、やはり自分が一番大切にしているアイデアを取り上げたいという思いが芽生えており、今回博士課程に応募することができなくても問題ないかと思っていた。

翌日の朝、2人が私に応募書類の提出は無事に済んだかを確認してきたが、結局提出できなかったことを伝えると、2人はとても残念そうな表情をして、近くの席に腰掛けた。きちんと事情を2人に伝えようと思ったので、2人をフロアの階段に呼び、そこで事情を説明しようとした。すると、私の目から涙が溢れ始め、誠実に事情を説明した。すると2人は突然大きな声で笑い始めた。

最初私は何が起こったのかよくわかっておらず、彼らは引き続き笑顔を浮かべており、少し時間を置いてようやく事の真相を話してくれた。どうやら彼らは、諜報機関に雇われており、私がどれだけ真摯に研究について考えているのかを試そうとしたようなのだ。

彼らは、私が一番大切にしている探究項目が何かを知っており、彼らに話したアイデアが私が最も行ってみたい研究ではないことを彼らは最初から知っていたのである。そうしたことから、仮に私が2番目か3番目ぐらいの研究テーマを取り上げて論文概要を提出したのであれば、それこそ不誠実だとみなそうと思っていたようなのだ。そのような話を彼らはしてくれて、ようやく事情が掴めた。最後に、2人はまた笑顔を浮かべ、別れの言葉を述べて私たちはそこで別れた。

その後、そのビルの横にある大型書店に足を運んだ。本屋の4階をぶらぶらしていると、資格コーナーの一角に、勉強法に関する面白そうな書籍があったので手に取ろうとしたところ、改めて背表紙とタイトルを見た時に、手に取る気持ちが失せた。そしてまたフロアを歩き始めると、そこに小中高時代の女性友達（KE）がいた。彼女は何人かの女性と丸テーブルに腰掛けて採点のようなことを

していた。見ると、英語の資格試験か何かの採点をしているようだった。それも受験者は全員、彼女が卒業した大学の後輩のようだった。

私は彼女に声をかけることをせず、採点している彼女の様子を見届けた後、別のフロアに移動しようと思った。するとちょうど母から電話があり、母の買い物が済んだようなので一緒に帰ろうということになった。私は階段で1階に降り、そこで1階に置かれている本や雑誌を眺めながら歩いていた。すると、面白そうな漫画があり、それを手に取って中をパラパラを眺め、それをまた元の場所において出口に向かった。

出口付近にはゲームの攻略本のコーナーがあって、そこに平積みにされていた本の中で、アート関係の面白そうなRPGについて解説した攻略本があった。その中身をパラパラと眺めて見たところ、そのゲームがとても面白そうだったので、家に帰ってそのゲームについて調べてみようと思った。

本屋の外に出てみると、そこに母はおらず、その代わりに、先ほど4階で採点をしていた女性友達がそこにいて、近くのコンビニに立ち寄らないかと持ちかけられた。私は特に買うものはなかったが、彼女について行き、コンビニ入った。ここ数年で日本のコンビニは少し雰囲気が変わっていることに気づき、コンビニにもオーガニック食品コーナーがあることに気づいた。そこで小さなコロッケやサラダなどが売られているのを見かけた。私は特にお腹が空いているわけではなく、喉も乾いていなかったので、何も購入せずに店を後にした。そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン：2020/5/31（日）06:24

5870. 今朝方の夢の続き：天高く上昇する龍のようなエネルギー

時刻は午前6時半を迎えようとしている。ちょうど今この瞬間は、近くの空の上空が雲に覆われていて、朝日が遮られている。雲の一団が去るまでもう少し時間がかかりそうだ。それが去れば、朝日を拝むことができるだろう。

先ほどまで夢について振り返っていたが、実は夢にはまだいくつか続きがあるので、それらについて振り返り、その後、本日の創作活動に取り掛かろうと思う。

夢の中で私は、アメリカ西海岸のどこかの街にいた。今から列車に乗ってどこかに行こうとしている最中であり、私の近くにはアメリカ人の友人が何人かいた。アメリカ人の友人の男女がそれぞれ数名ほどその場にいて、彼らは皆俳優だった。

列車のプラットホームに向かっている最中に、彼らの歩き方や話し方がまるで演技のように見えてしまい、とても興味深く思った。彼らの様子を観察するため、私は彼らとは少し距離を取って、彼らの姿を後ろから眺めながら歩き始めた。

すると先頭を歩いている男性の友人が、後ろを振り返り、満面の笑みを浮かべながら、手招きをして早くこっちにくるように私に合図をした。それでも私は彼らと距離を取ることをやめず、むしろさらに距離を取り始めた。気がつくと、自分の心の中に、彼らと別れて1人で列車に乗りたいという気持ちがあった。その気持ちを大切にしようと思ったところ、彼らの姿はもう見えなくなっていた。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、広場が目の前にある社宅の前に私はいた。今から広場で友人たちとサッカーをしようと思っていた。すると、友人の何人かが社宅の壁に向かってボールを蹴ろうとしていた。それを見て私は、この社宅の壁は硬くなく、そしてガラスでてきている箇所もあるのでそれは危険だと彼らに伝えた。

すると、たいていの友人たちはボールを蹴ることを止めようとしたのだが、中に1人だけそれでもボールを蹴ろうとしている友人がいた。彼にもう一度説明したところ、彼は納得したようであり、ボールを蹴ることをやめた。広場の真ん中に到着すると、そこで私は、小学校時代に所属していたサッカークラブの中でサッカーが一番うまかった友人と一緒に変わった遊びを始めた。それはセパタクローのような遊びである。

そこで用いていたものはセパタクロー用の球ではなく、エネルギーの塊であった。エネルギーボールを上空に蹴り上げ、そこからセパタクローのラリーをその友人と始めた。すると、それを面白がってか、多くの人たちが広場に集まってきており、気がつけば大人数の観客が見守る中で、友人の彼とラリーを行っていた。エネルギーボールの色は黄緑色をしており、それを蹴るごとに、エネルギー

が飛び散り、その光景は美しかった。そこで夢の場面が変わった。最後の夢の場面もとても印象に残っている。それは一つ前の夢とも関連しているように思える。

私は公園かどこかの真ん中に立っていて、地面から途轍もないほどのエネルギーの流れが天に向かって昇っている場面に出くわした。そのエネルギーの流れは私の身体を包んでいて、自分が立っている場所がまさにエネルギーの流れの中心のようだった。そのエネルギーは黄金色をしており、それが天高くどこまでも上へ上と向かっていく姿は、圧巻の美しさだった。どこかそれは黄金色の龍のように思え、私は自分自身の中にそうした龍がいるのではないかと思った。あるいは、このどこまでも天高く上昇する龍のような姿をしたエネルギーが自分に他ならないのではないかと思った。螺旋を描きながら天に向かうエネルギーの流れを、感動の心で眺めていると、静かに夢から覚めた。フローニンゲン：2020/5/31（日）06:46

5871.「タイタニック型」の能力開発や人材育成の危険性

時刻は午後7時を迎えた。今、ゆっくりと日曜日が終わりに近づいてきている。

今日は午後に街の中心部のオーガニックスーパーに足を運んだのだが、明日が祝日のはずなのに、店は今日が休みであり、明日は昼から営業されるとの張り紙が貼ってあった。購入したいものが買えなかったことは残念だったが、とても良い散歩を楽しむことができた。

自宅から街の中心部までは良い散歩コースになっており、明日にまたその道を歩くことは苦ではなく、むしろ散歩を明日も楽しめることを喜ぼう。行き道は軽くジョギングをし、帰りはゆっくりと散歩を楽しむ。今日もそのような形で自宅から店まで往復したところ、軽く身体を動かすことの効能を実感した。ここ最近は、寝る直前にバランスボールで背中をほぐすだけではなく、ヨガも行っており、それによって入眠がより早くなり、睡眠の質も高まっているように感じる。

今日もいくつか雑多なことを考えていた。潜在能力が開花し、解放されたのはいいものの、それを発揮することが許容される文化と環境があるかどうかが重要であることについて考えていた。

卵から雛が孵ったのはいいものの、外の環境が雛が生きることに相応しくない場合には、雛が卵から出てきたことを即座に喜ぶことはできない。人間の潜在能力についてもそのようなことが言えるの

ではないだろうか。潜在能力が発揮できる場所とそれを受け入れる文化や環境がなければ、潜在能力を開花させることはむしろ悲劇をもたらしうる。その他にも、先日考えを巡らせていた標準化アセスメントについての件と関連して、ある特定の能力をまるで万能薬であるかのように取り上げ、その能力のみを開発させることに駆り立てる風潮には気をつけなければならない。

それは能力や知性の多様性を確保することの大切さの論点と関係しており、そのような「タイタニック型」の能力開発や人材育成は、ひとたびその能力や知性が通用しない社会コンテクストに私たちの社会が変容した際に危険なのはもちろんのこと、以前に指摘したように、人間の画一化と矮小化をもたらす点においても危険である。

それが沈んだらおしまいの能力開発や人材育成がなされていないかについて、常に注意深くいる必要があるだろう。また、能力や知性を数値化し、商品化する類の市場志向の能力開発や人材育成の危険性についても考えを巡らせていた。人間発達については本当に問題が山積みな現代社会である。フローニンゲン：2020/5/31（日）19:26

5872. 生と死と結びついた発達：今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えた。4時半に起床した際には、すでに小鳥たちが鳴き声を上げ始めており、寝室の窓からは朝焼けが見えていた。遠くの教会の空が朝焼けに染まり始めている光景が印象に残っている。

今日と明日のフローニンゲンの天気は良く、気温は高い。しかしながら明後日からは、小雨が降る日が続く。最高気温に関しても15度前後であり、最低気温に関しては10度を下回る。早いもので今日から6月を迎えたが、フローニンゲンは涼しさに包まれている。

昨夜、発達するということは、いかに生きるかということと、いかに死に向かうかということと密接不可分の関係にあり、それらと切り分けては決してならないのではないかと考えていた。歪な発達とは、いかに生きるか、いかに死に向かっていくかということを蔑ろにしたままに希求された現象のことを指し、それは生と死から分離されたときに起こってしまう現象なのではないかとも考えていた。生と死があっての発達である点を忘れないようにしていこう。そのようなことを昨夜考えていた。

そよ風がゆっくりと進行し、新緑の街路樹の葉を撫でている。それはとても優しげである。

今朝方も夢を見ていたが、今日はそれほど多くのことを覚えていない。夢の中で私は、学校の教室にいた。そこは実際に通っていた小学校のようである。教室には何人かの生徒がいて、私たちは、6年生の時の担任の先生の授業を受けていた。授業が終わり、帰宅の時間になったときに、私は昨日の日記を先生に手渡した。

本来日記は朝の時間に先生に提出することになっていたのだが、その日私はそれを忘れてしまっていたようだった。日記を手渡すと、先生はその場ですぐに日記に目を通してくれた。そして赤ペンを持って、ある箇所に線を引き、再び日記を私に返してくれた。私は日記に、世界史の論述問題の自分なりの解答を書いていた。中世ドイツの経済状況を、農業の観点から記述した問題だった。

先生が赤ペンで線を引いてくれた箇所に目を通すと、どうやら私はその箇所に関して史実を間違っていたようだった。当時のドイツを支配していた人物の名前と、彼が行った行動について間違えているようだった。それを受けて私は、明日からは普通の日記を書こうかなと思った。そもそも日記に世界史の論述をしたところで、その論述内容が大して自分の頭の中に残っていないことに気づいたのである。それであれば、自分の毎日の生活の中に起こることを書き留め、それを定着させていくことの方が良いのではないかと考えた。そのようなことを考えていると目が覚めた。そして、寝室の窓の外に広がる朝焼けがゆっくりと自分の目にやってきた。フローニンゲン:2020/6/1(月)05:33

5873. 渇望と飽和:土着神と創作活動

渇望と飽和。それが自分にあるということ。それを先ほど考えた。自分の内側には、形になることを渇望しているものがあり、それを形にしようと渇望している自分がいる。それら双方の渇望する存在。そして彼らの思いは飽和している。今の自分の創作活動の原動力には、そうした渇望と飽和があるのだろう。形になろうと待っている存在の渇望感が飽和しており、それを形にしたいと思う自分の渇望感が飽和している。それらが互いに交わり合い、調和をなすことによって今の自分の創作活動が前に進んでいる。そのようなことを先ほど考えていた。

今朝の起床は午前4時半と、それほど早いわけではなかったが、今のところ非常に充実した創作活動が行われている。午前9時半を迎える今の段階において、絵に関しては4枚ほど描き、曲に関し

ては7曲ほど作った。今日は昼前に1件ほどオンラインミーティングがあるだけなので、それ以外の時間は全て創作活動に充てていこう。ミーティングまでまだ時間が十分にあるので、ここからもまた理論書を片手に、譜例をもとにして作曲を続けていく。

それにしても今日もまた本当に穏やかだ。この街には平日と休日の区別などないのかもしれない。今日は週の初めの月曜日なのだが、その時間の穏やかさは休日のそれと変わりない。時の感覚質は休日のそれであり、雰囲気もまたほぼ同じである。引き続き、時を超越しながら自分の取り組みに従事していこう。

先ほど、様々な場所で日記、絵、音楽を作る過程の中で気づいたことについて考えていた。それぞれの場所には、創造を司る固有の土着神が存在していて、その存在から固有の感覚を受け取ることに応じて、自ずと創作物の質感が異なってくることは興味深い。いつも旅の最中に実感するのはそれである。そこから、仮に地球上だけではなく、様々な惑星に足を運び、そこで創作活動に従事するとどのようなものが生み出されるのかについて考えていた。それを考えるだけで、どこか胸が躍る。

きっとそれらの創作物は、地球上では生み出され得ない感覚を内包したものになるだろう。今後も地球上の様々な土地で創作活動に励み、いつか様々な惑星の上で創作活動に従事してみたいと思う。そのような想像力を働かせてくれる広く落ち着いた青空が、フローニンゲン上空に広がっている。フローニンゲン：2020/6/1（月）09:28

5874. 再び活気付き始めたフローニンゲンの街

時刻は午後7時を迎えた。今、6月を迎えた最初の日がゆっくりと終わりに向かっている。日が完全に沈むまではあと2時間半以上あるが、今の外の世界は1日を締め括ろうとしている雰囲気を発し始めている。

今日は午後に街の中心部のオーガニックスーパーに買い物に出掛けた。昨日は店が閉まっていたのだが、今日は昼からやっており、必要なものを購入した。今日は“Whit Monday”という祝日であったためか、午後から街の中心部のレストランのテラス席は客で賑わっており、昼からお酒を飲んで

いる人たちを数多く見かけた。彼らの表情は一様に幸せそうであり、天気の良さもあって、とても陽気な雰囲気が街全体を包んでいた。

かかりつけの美容師のメルヴィンが述べていたように、今日からレストランもオープンし、そうしたことも今日の賑わいを生んでいたのだと思う。コロナが落ち着き、再び街が活気付いてきている様子を見て、少しばかり安堵の気持ちがあった。

歩いているだけで幸せな気持ちになれる街。フローニンゲンはそのような街であると今日も思った。

散歩の途中に吹くそよ風がとても優しく、そして清々しかった。新緑の街路樹が植えられた道路を通っていると、立派な大木の切り株があった。そこだけ大木が切り倒されていて、切り株の状態のものが目についたのである。なぜ木が切り倒されてしまったのかは定かではない。ひょっとすると、少し前に激しい雷が落ちてきた日があったので、そのときに大木が避雷針の役割を務めたのかもしれないと思った。そうでなければ、一体誰がこんな立派な大木を切り倒すというのだろうか。そのようなことを考えながら、雷を受け止めてくれたであろう大木の切り株をしばらく静かに眺めていた。

散歩の最中は、幸福感と共に瞑想の意識状態にあり、思考が澄み渡り、そしてそこからまた穏やかな考えが生まれては消えを繰り返していた。そのうちの1つに、今年の年末年始は、マジョルカ島かシチリア島で静かに過ごそうかと思った。オランダは年末に近づいてくると花火がうるさく、年越しも騒々しいので、できれば今年もどこか静かな場所に行きたい。昨年はマルタ共和国で年を過ごしたが、今回は上記の2つの島のどちらかが良いだろうか。マジョルカ島であれば、フローニンゲン空港からでも直通があることを随分と昔に知り、何か縁があるかもしれないと思う。また、オランダ人の友人たちは大抵シチリア島に行ったことがある人が多く、以前から彼らの話を伺っていたので気になっていた島である。また時間を作って、マジョルカ島やシチリア島について調べてみようと思う。フローニンゲン：2020/6/1（月）19:26

5875. マジョルカ島との縁：何者かに向かって

時刻は午前6時を迎えた。今朝は見事な朝焼けを起床直後から拝むことができた。今朝はゆったりと5時まで寝ていたのだが、目が覚めた瞬間に寝室の窓の外を見ると、そこには赤味がかった見事な朝焼け空が広がっていたのである。私は体を起こし、それをしばらく眺めていた。

昨夜は小鳥たちの鳴き声を子守唄がわりにして夢の世界に入っていった。そして朝においては、彼らの鳴き声は優しい目覚まし時計となっていた。

昨日、今年の年末年始をどこで過ごすかについて書き留めていたように思う。候補としては、スペインのマジョルカ島か、イタリアのシチリア島にしようかと書き留めていた。その後、少しばかり調べてみたところ、今年の年末年始はスペインのマジョルカ島で静かに過ごそうかと思った。

マジョルカ島は、どうやらヨーロッパのハワイと呼ばれているらしく、ヨーロッパ大陸の様々な国からこの島に観光でやってくるそうだ。特に、ドイツやイギリスから来る人が多いとのことであり、マジョルカ島の街にはドイツ語表記の看板などの案内がなされていたり、英語に関しても問題なく通じるようだ。マジョルカ島について調べていたときに興味深いこととしては、私がこれまで注目していた芸術家たちもこの島を愛していたということだった。例えば、作曲家のショパンはマジョルカ島と関係が深く、フランス人作家のジョルジュ･サンドとこの島に長く滞在していたそうである。

昨年の春にバルセロナに訪れたときには、ジョアン･ミロの博物館に足を運んだ。そのミロもマジョルカ島に縁があり、彼の母親がマジョルカ島出身であるだけではなく、ミロ自身もこの島に定住していたそうだ。そのような理由で、ミロの作品と彼のアトリエのある美術館がマジョルカ島にあるそうだ。そのようなことを知って、是非とも今年の年末年始にはこの島で過ごしたいと思ったのである。

気候についても申し分なく、冬は最高気温が10度を超えるほどの暖かさのようなので、随分と過ごしやすい。まさに昨年訪れたマルタ共和国のような気候である。気候面ではシチリア島も同じようなものだが、今回はショパンやミロとの縁もあり、マジョルカ島に行ってみることにする。フローニンゲンの地方空港から直通で行けることも何かの縁だろう。

昨日、フローニンゲンの街の中心部に向かって歩いているときに、自分は何者でもないところから再出発をし、今もその歩みを歩いていることについて考えていた。

この現代社会は、私たちを虚飾された何者かにしようと促してくるが、それから離れ、再度自らの手で何者かに向かって歩みを始めたのがアメリカ時代の時だったように思う。そこから緩やかではあるが、歩みを進め、一度清々しいほどに何者でもない者になったのだが、今はまたそこから何者かに向かって歩みを進めている自分を見出すことができる。そしてその自分は、この世界にはない居場

所を自らの創造物を通じて作り始めた。今の自分は、自らの創造物によって作り出された居場所の中で、再び何者かに向かって歩みを始めている。そのようなことを感じている。おそらくそこからまた、改めて何者でもない方向に向かっていくのかもしれない。そうした自己の成熟過程を見て取ることができる。フローニンゲン:2020/6/2(火)06:29

5876. 今朝方の夢

時刻は午前6時半を迎えようとしている。起床時と同じように、小鳥たちが澄み渡る鳴き声を上げていて、それを聞きながら落ち着いた瞑想状態になる。本当に、一日中彼らの鳴き声を聞きながら平穏な心でいられることの有り難さを思う。明後日からは小雨が降る日が続くようだが、今日は天気がとても良く、気温も随分と上がるそうだ。今日は初夏を感じられるような1日になりそうだ。

先ほど、パソコンのソフトウェアのアップデートを待っている間に、6枚ほど絵を描いていた。いつもは早朝に、3枚から4枚ほど描くのが習慣になっているのだが、今日はすでに随分と描いた。

ここから夢について振り返り、今度は早朝の作曲実践に取り掛かっていこうと思う。作曲に関しては、毎日心底楽しみながら、その進展を確認することができているのはとても喜ばしい。

夢の中で私は、学校の教室にいた。そこは少し見慣れない教室だったが、違和感はさほどなかった。教室には机はなく、椅子だけがあり、椅子は全て教室の前側に寄せられる形で配置されていた。

小中学校時代の友人たちが椅子に腰掛けており、どうやらこれから授業があるようだった。すると、イギリス人の男性の教師がやってきて、これから英語だけを使った授業が行われることになった。私以外の友人たちは留学経験も海外生活の経験もなく、あまり英語が喋れないようであり、先生の話についていくのが難しそうであった。その男性教師は線が細いのだが、性格は少し高圧的であり、友人たちの発音を逐一直すようなことをしていた。すると突然、その英語教師の姿が消え、そこには中学校時代にお世話になっていたバスケ部の顧問の先生がいた。先生はなぜかサッカー部の顧問を務めており、本日行われる予定の練習試合について連絡を始めた。夢の中の私はサッカー部に所属していて、キャプテンを務めていた。

練習試合の相手の2校が急遽試合をキャンセルしたとのことであり、その代わりに、明日の夜10時から練習試合を始めることになったと先生が述べた。それを聞いた時、随分と遅い時間から試合を行うのだなと思った。夜の9時半には就寝準備を始めている私にとって、そんな時間から試合をすると、生活のリズムが崩れてしまうと思い、私は試合には行かない旨を先生とメンバー全員に伝えた。先生は強く私を説得しようとしていたが、仮にキャプテンの座を下されようが、今後試合に一切出られなかったとしてもお構いなしに、私は自分の生活のリズムを最優先させるという強い意思があり、明日の試合には絶対に行かないと改めて強く主張した。

するとそこで、1階から私の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。廊下を出て、後者の裏側の1階を見てみると、男子の声で間違いなく私の名前を呼ぶ声が聞こえてきているのだが、その人物の姿は見えなかった。そこでまた教室に戻ると、そこは先ほどの椅子だけの教室と違い、いつもと同じように机と椅子がセットで整列された形で配置されていた。ただし教室には、高校時代のクラスメートの女性友達が1人だけいて、彼女は私の席のすぐ近くだったので、何をしているのかと声をかけた。どうやら、私に対して何かの支払いをするために教室で待っていてくれていたらしく、携帯のような端末を取り出して、お金を送金してくれた。自分の端末に着信があり、送金を承諾する旨のボタンを押すために、パスワードを入力し、そして承諾をした。

その後、彼女はおもむろに口を開き、先ほど私の名前を呼んでいたのは、先日学校を辞めた友人だと述べた。なるほど、道理で聞き覚えのある声だと思った。その後、小中高時代の2人の友人(FF & KM)が教室にやってきて、明日の試合に来てほしいと私を説得しにきたようだったが、私はそこでも彼らに、明日の試合には行かないと明確に述べた。そこで夢から覚めた。

赤味がかったオレンジ色に輝く朝焼けが目に飛び込んできて、起床直後の私はその美しさにしばらく目を奪われていた。フローニンゲン:2020/6/2(火)06:48

5877. 絶え間ない平常心を持って:愛と美の探求と実践の日々

時は静かに流れ、時刻は午後7時を迎えた。毎日決まってこの時間帯に日記を綴っているように思う。夕食後のこの時間帯は、優しげな夕日がとても美しく、そよ風も爽やかである。振り返ってみれ

ば、今日も非常に充実した1日であった。ただし1点だけ、些細なことで問題に対応する必要があったが、その問題についても解決の道筋が見えている。

今日もまた創作活動に打ち込む1日であった。創作活動を通じて、自己の内側に眠っているものや抑圧されているものと向き合い、それを感じながら形にしていくことが続いている。それによって、治癒と変容の歩みが進んでいるのがわかる。絵と音楽を創作することは、そうした効能を持っており、それは日記とはまた違った形で行われる。

ここ最近は、ガラクタのような情報から精神的な距離を取ることが習慣となっており、そのおかげで自分の取り組みに集中できている。現代社会で生きていく際には、本当に注意しなければ、私たちの集中力はいとも簡単に削がれてしまう。それによって、自分が本来取り組むべきライフワークに十分打ち込めなくなってしまう。それはまた、自分の人生を無為にすることにも繋がる。決してそのような形で、自分の貴重な人生の時間を無駄にはしない。絶えず落ち着いた心でいること。禅の高僧の南泉がかつて、「平常心、それこそが道（タオ）である」と述べたように、絶えず平常心でいること。そうした状態を絶えず保とう。

ここ最近は休憩を取る際には、バランスボールで身体をほぐしたり、散歩がてら買い物に出かけたり、窓の外の景色をぼんやり眺めることが習慣になっている。それに加えて、無心で絵を描くことも休息の1つの方法になっている。そうした休息は、脳と心の浄化をもたらし、より平穏な状態に自己をいざなってくれる。明日もまた、集中力を削ぐような情報には触れないようにし、平穏な心で自分の取り組みを前に進めていこう。

昨日に考えていたことを最後に書き留めておく。昨日は改めて、数値や客観的な指標には還元できない現象学的な内側の感覚及び体験を大切にしていこうと思った。それが人間の最後の拠り所、あるいは最後の砦のように思えるのだ。

人間が人間であることの本質は、そうした数値や客観的な指標では決して還元できない質的なものであり、感覚的なものなのだ。まさに、愛や美はそうしたものだと言えるだろう。そうであるがゆえに、それらの探求と実践を日々行っている自分がいるのだろう。人間の究極的な拠り所を守りながらに

して、さらに育んでいくこと。それが自分に与えられた1つの使命である。フローニンゲン：2020/6/2（火）19:26

5878. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今朝はうっすらとした雲が空を覆っている。それは朝日を遮るようなものではないので、後しばらくしたら朝日を拝むことができるだろう。

昨日、「一瞬一生の会」の皆さんのリフレクションジャーナルを読みながら、自分も毎日小さな気づきを言葉に残していこうと思った。それがどんな小さなものであってもいい。小さな気づきや発見、そして自分の心に触れたものをとにかく言葉の形にしておくこと。そして言葉の形になろうとする命に言葉の形を与えること。それを今後も継続していく。

今朝方は少々夢を見ていた。夢について振り返ったら、今朝は創作活動に入る前に、両親に連絡をしておこうと思う。今日の午後に2人とZoomで話をする約束をしており、Zoomの使い方について簡単にメールで説明しておこうと思う。

今朝方の夢。夢の中で私は、日本のどこかの田舎町にいた。そこは山間にあり、転々としている家々には、必ず畑があった。雰囲気とはとても長閑であり、自然の豊かさも感じる。その町で私は、学校の行事の一環として、合宿に参加していた。それは部活か何かの合宿だったように思う。ただし、1つの部活が合宿をしているのではなく、複数の部活が合同でそこで合宿をしていた。

部活の練習を終え、夕食前に風呂にでも入ろうかと思って、風呂に行くと、その風呂がとても小さく、1人しか入れないようなものだった。しかし幸いにも、その場には私しかいなかったので、早速風呂に入ることにした。すると、風呂のドアを開ける人がいて、振り返ると、そこには高校時代にバレー部のキャプテンを務めていた友人がいた。彼と私は仲が良く、風呂の扉を開けたまま少し話をし、もう少し待っててくれと彼に伝えて、早めに風呂を切り上げることにした。

早く体を洗おうとしたところ、排水溝をふと見ると、そこには髪の毛や物が排水管に流れていかないようにするための金網がかけられており、そこには外国の硬貨が何枚かあった。それぞれ種類が異

なり、金額が異なっていた。きっとそれは友人のものだと思ったので、それを拾い上げることをせず、後ほど友人が風呂に入ったときに拾うだろうと思った。

風呂から上がり、友人の彼が風呂から上がるのを畳部屋の休憩所で待つことにした。風呂から上がった彼と夕食までの時間を話して過ごすことにしたときに、彼の家にはどうもネズミが出るらしく、夜中にゴソゴソと動き出すようだった。彼曰く、それを捕まえるのは本当に大変で、いつも逃してしまうとのことだった。そこで夢の場面が変わった。

次の夢の場面では、私は見慣れないオフィスのフロアにいた。そこでは机と椅子がパーティションで区切られていない形で置かれていて、机の上にはパソコンが置かれていた。私は自分の席について仕事をしていると、後ろから1人の見慣れない女性が私に声を掛けてきた。どうやら、私とは職階が異なり、彼女の机はとても狭く、パソコンを置くのがやっとのことであり、それでは仕事が捗らないとのことだった。

彼女の机のスペースを見せてもらうと、確かにそれは狭く、これでは仕事にならないだろうなと思った。そこで私は、ある性格の良い上司に話を持ちかけてみることにした。上司の席に行くと、上司は子供のような目をして、ヨーヨーをして遊んでいた。

上司:「あぁ、加藤君、いいところに来た。これ見てよ。つい懐かしくてこのヨーヨーをこのあいだ買ってしまったんだ～」

上司はそのように述べた。上司のヨーヨーの腕前がどれほどかを知っていなかったので、最初オフィスでヨーヨーを振り回すことは危ないように見えたが、上司の手さばきは手慣れており、昔ヨーヨーで随分と遊んだのだなということが伝わってきた。そこで私は、先ほどの女性の不満を上司に相談した。すると、上司は自分の机も狭くて困っているのだと述べ、その件については明日また話し合おうということになり、上司は早々に帰宅してしまった。

そこから再度自分の席に戻って、自分の机のスペースを確認すると、確かに自分の机も狭いが、それでもなんとか仕事にはなると思った。そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2020/6/3(水)05:58

5879. 久しぶりに両親と話をして

時刻は午後7時半を迎えた。今日は午後に、久しぶりに両親と話をすることができ、愛犬も含め、元気そうで何よりであった。日本のコロナの状況などを聞き、お互いに近況報告し合ったり、父に依頼をしていた事柄の件で話をしていると、あっという間に2時間弱ほどの時間が経った。

先日の日記で言及したように、父はバルコニーで椎茸を栽培しているのだが、それ以外にも、市販のウィスキーを特製の樽に入れて、より美味しいウィスキーを作っていることを知って驚いた。何やら、アウトドア関係の雑誌を購入した際に、それに付随していた「大人の逸品」という冊子の中に、ウィスキーをより美味しくさせることのできる樽を見つけたらしい。

父が購入したのは2Lほどのものだとのことであり、Zoom越しにそれを見せてもらったが、なかなかお洒落な樽だった。私は普段は全くアルコールを口にしないのだが、実家に帰った時だけ両親と少しお酒を飲むことを楽しみにしており、今回の秋の一時帰国の際に実家に戻ったときには、父が作ったウィスキーを少しもらおうかと思う。

その他にも、昨年のコーヒーミルに引き続き、今はエスプレッソを淹れる専用の道具を購入したらしく、それも画面越しに見せてくれた。私もフローニンゲンの街の中心部のコーヒー専門店で、それと同じ道具を購入しようか迷ったほとであり、その件を伝えると、母が「2人は似ているところがある」と笑っていた。

数日前の日記で書き留めていたように、大学のOB会の会費の引き落としに関する夢を見ていて、夢の中で母がそれについて自分に電話をしてきてくれていた。その件は特に急ぎではないと思っていたので、夢から覚めた後、この秋に実家に戻った際に確認をしようと思っていた。すると驚いたことに、こちらから切り出していないのだが、母の方からその件について確認をしてきたのである。こんなこともあるものだと大いに驚いた。

夢の中で母から電話を受けたことと、その数日後に、Zoom越しに全く同じ件で母から連絡を受けるとは「夢にも思っていなかった」。無意識の世界、そして夢の世界は本当に奥深い。おそらく母の無意識と自分の無意識はどこかで繋がっていて、それが共鳴をして今日のようなことが起こったのだと思う。

それ以外にも、私の無意識はある特定の金融市場とも繋がっていて、その相場の高騰が夢の中に現れ、夢から覚めて実際に確認すると、本当にその相場が上がっていることが過去に何度かあった。ここ最近はそうした夢を見ていないが、自分が関心を持っている市場について、何か近々またどこかのタイミングで大きな動きがありそうだと予感している。その後、母の話を少し聞いていると、最近はバッハのインベンションの練習に励んでいるとのことだった。秋には母の演奏を聞けることが楽しみである。

最後に、この秋に自分が石川県と福井県に行く話となった。父から教えてもらった情報曰く、大元を辿れば、加藤家は平安時代の藤原家がルーツにあり、石川県の加賀が加藤家のゆかりとのことであった。加賀には加藤家ゆかりの神社があるらしく、それがどこにあるのかを調べて、是非この秋にそこに足を運んでみたいと思う。フローニンゲン：2020/6/3（水）19:51

5880. 今朝方の夢

時刻は午前5時半を迎えた。今日は早朝から、空に灰色の雲がかかっている。天気予報を確認すると、今日は断続的に小雨が降るらしい。明日以降も1週間ほど、今日のように断続的に雨が降る日が続くようだ。オランダは秋から冬にかけて雨が降る日が多いので、この時期にこうして小雨が降る日が続くというのは珍しい。

それではいつものように今朝方の夢について振り返り、その後に創作活動に励んでいく。夢の中で私は、見知らぬ街の講演会場にいた。そこでは、直接顔を知っているわけではないが、大学の先輩で中年の男性の方が講演をすることになっていた。その方は大学卒業後、どこかの企業に務め、その後に化学の博士号を欧米の大学院で取得し、今はその専門知識を活かした仕事をしている。私が卒業した大学は文系の大学なので、卒業生がそのように理系の道に進むことは珍しいのだが、自分自身がそうした理系の研究者に転身したこともあり、その方には幾分親近感が持てた。

その方の講演が始まってみると、喋りが止まらず、予定の時間を大幅に超えていった。その方の予想としては、講義を兼ねたその講演は、20時間ほどになるとのことだった。さすがにそれだけ長い時間講演を聞くことはできないと思い、また講演料の支払いは後払いであったため、もしかしたら延長した分の費用を多く払う必要があるのかもしれないと思った。そうしたこともあったので、私は4時間

ぐらいのところでやめにし、講演会場を去った。すると、大学時代の友人と遭遇し、彼はこれから、転職の助言を受けに先輩に話を聞きにいくとのことだった。

その先輩は先ほどの講演者ではなく、もっと若い人のようだった。せっかくなので一緒に話を聞きに行こうと彼に持ちかけられ、私もついていこうと思ったら、その先輩には相談料の支払いをする必要があるとのことだった。友人は私と2人で話を聞きにいくことによって、相談料を折半したいと思っていたらしかったが、私はあまり先輩の話を聞きたいと思わなかったので、友人の申し出を断ることにした。そこで夢の場面が変わった。

上記の夢においては、そういえば講演会場で話を聞いている最中に、高校時代のクラスメートが私の近くに座っていることに気づいていた。彼は机と机の通り道の部分に椅子を置き、そこで講演を聞いていた。机を使ったらいいのにと私は彼に述べたが、彼はニコリと微笑み、机は他の人に譲るということを述べた。

その他にも夢を見ていたのを覚えている。合宿場のような場所の広間で友人たちと話をしていたり、相場の上昇に関する夢もあったように思う。後者については、ちょうど昨日の日記にその話題について言及していたように思う。今のところ、現実世界においてその相場は大きな上昇局面を迎えていないが、確かに上昇フェーズに入っているような兆候が見られるため、今後何か大きな動きがありそうだと予感される。フローニンゲン：2020/6/4（木）05:52